



平成29年7月3日

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構

日本原子力研究開発機構から受け入れた被ばく作業員の方々の 三回目の入院について（お知らせ）

国立研究開発法人量子科学技術研究開発機構(理事長：平野俊夫 以下、量研)は、放射線医学総合研究所（以下、放医研）において、日本原子力研究開発機構大洗研究開発センター燃料研究棟で被ばくされた作業員5名を患者さんとして受け入れ、緊急被ばく医療施設などで検査と治療を行ってきましたが、そのうち3名の患者さんが7月3日に三回目の入院をされ、検査と治療を開始しましたのでお知らせします。

患者さん5名は、6月7日～13日に一回目、6月18日～26日に二回目の入院をされ、それぞれDTPA(注1)治療を実施してきました。複数回の治療を実施したのは、バイオアッセイ(注2)検査の結果から全員に内部被ばくが確認され、かつDTPA治療の効果が認められたためです。その後の検査結果を検討し、3名の患者さんについては3クール目のDTPA治療を実施することが適当と判断したため、再度入院していただいたもので、今回も5日間を1クールとするDTPA治療を行う予定です。一方で、2名の患者さんについてはバイオアッセイ試料中のプルトニウムの量が非常に少なくなっており、ご本人とも相談の上、入院は行わないことにいたしました。バイオアッセイ検査は継続します。

なお、患者さんの検査結果に基づく被ばく線量の評価については、現在詳細な解析と検討を進めており、結果の公表などについては、後日、改めてお知らせいたします。治療を担当する医師は患者さんのプライバシーに配慮する義務があり、検査結果などの取り扱いについては慎重に対応する必要があることもご理解ください。

— 以上 —

(注1) DTPA：ジエチレントリアミン5酢酸（英語名：Diethylene-triamine-pentaacetic acid）。体内に取り込まれたプルトニウムの体外排泄を促す効果があるとされる、キレート剤と呼ばれる薬剤。プルトニウムを積極的に排出し、内部被ばくの量を減らす効果が期待される。

(注2) バイオアッセイ：個人の被ばく線量評価のため、尿、便など人体からの排泄物中の放射性核種の放射能を分析する方法。